

教会の暦では今週の水曜日 2月 14 日からレントと呼ばれる「受難節」が始まります。レントという言葉は断食するということばが語源と言われています。イースターの前、日曜日を除く 40 日間、キリストが苦難を受けたことを思い起こし、十字架の苦しみと死を心に刻む期間です。特に受難節、最初の主日に、教会ではイエスの荒野での誘惑の記事、つまり今日の箇所が伝統的に読まれてきました。それは、このイエス・キリストの誘惑の出来事というのが、単なる誘惑や試練に打ち勝つというようなことではなく、私たちが生きているということの全体に関わること、特に、この世の苦しみや受難と深い関係があるからです。ではどのように関係があるのでしょうか？それを見てゆきます。

1) 荒野の四十年

「レント」の 40 日は主イエスが荒野で過ごされた 40 日に由来しています。さらにイスラエルが出エジプトのあと、荒野を 40 年、旅したことで深い関係があります。神はイスラエルの人々を、さまざまな奇蹟によって救い出されました。しかし、エジプトからすぐに、カナンの地に導かれませんでした。40 年をかけて約束の地カナンへと導かれました。

第一に、それは人々を守るためでした。もし、イスラエルがそのままカナンを目指したら、エジプトの国境で警備する者に全滅させられたでしょう。そうでなかったとしても、カナンの先住民たちとの争いにすぐに巻き込まれたに違いありません。女性も子供も大勢いて、何の組織もされていない集団を守るために、神は人々をシナイの荒野へと導かれたのです。

第二に、人々に心おきなく神を礼拝させるためでした。モーセはエジプトの王ファラオに「私たちに荒野へ三日の道のりを行かせて、私たちの神、主にいけにえをささげさせてください」(出エジプト 5:3) と願い出しました。これは、エジプトを脱出するための口実ではありません。神は、ほんとうに、イスラエルの人々が荒野で礼拝をささげるのをお望みになったのです。ファラオは「それならエジプトでも出来るだろう」と言いましたが、モーセは「私たちの捧げもの(羊)はエジプトの人たちが忌み嫌うものなので、そんなことをしたら私たちの身が危険です」と言いました。そして「このことは神が私たちに命じていることなのです」と言って、荒野に出てゆき、そこで神に出会い、その栄光を目撃し、礼拝をささげました。

第三は、イスラエルの人々がそこで神への信頼を学び、名実ともに「神の民」となるためでした。荒野では人間からの脅威はありませんが川も田畑もありません。神が必要なものを与えてくださると信じなければ、荒野を旅することはできません。つまり神は、ご自分に頼らせるために、イスラエルを荒野に導かれたのです。イスラエルは、エジプトを出て「神の民」となりました。神は「十戒」をお与えになって、「わたしは、あなたをエジプトの地、奴隷の家から導き出したあなたの神、主である」(出エジプト 20:2) と言われました。神は、イスラエルをご自分の民とされ、イスラエルは主を自分たちの神としたのです。しかし、それだけでは、イスラエルは、名前は「神の民」であっても、実際に神に信頼し、神のみわざを体験し、神の恵みを宣べ伝える「神の民」になることはできません。例えば誰かと売買契約を結んで契約書を持っているだけでは実感が湧きません。契約通り、物やお金が動いたり支払われたりする時にその価値を認めます。同様に神はイスラエルを実質的に「神の民」とするために十戒や律法つまり契約を結ばれましたがそれに従う中で神のみわざと恵みを体験し、荒野で、神に信頼することを学ばせようとしたのです。

2) イスラエルの失敗

ところが、イスラエルは、この神の訓練に、さまざまな分野で失敗しています。

第一の分野は「食べ物」です。神はイスラエルに岩からほとばしる出る水を与え、天からのパンをお与えになりました。最近の研究調査によってイスラエルが旅したシナイの荒野の道筋にはどこにも地下水

脈があることが分かっています。地下の水脈は人の目には見えません。しかし、それは人々の行く先々にのびていました。信仰とは、たとえ目には見えなくても、神が必要なものを備えてくださることを信じ、神に期待することです。ところが、人々は目に見えるところだけで判断して、「飲む水がない」「食べるパンがない」「神は、われわれをここで死なせるのか」などと言ってつぶやき、文句を言いました。目に見えないところにすでにある神の備えを信じるのがなかったのです。結果的に彼らは神が養ってくださるという奇跡の体験をしているのに日にちが経てばすぐに不平不満を言ったのです。

第二の分野は、「神の導き」です。神は、常にわたしたちに最善のことを、最善の時にしてくださいます。ところが、しばしば、わたしたちは神の導きに従うよりも、自分が願うことを、自分が望む時に、自分の方法で成し遂げようとします。ある人は神の時を待つことができず先走って失敗します。また、ある人は神が進みなさい、止まりなさい、辞めなさいと行動を促しておられるのに、行動を起こそうとしないで、神に従わないことがあります。荒野を旅したイスラエルもそうでした。神が自分の思うように動くことだけを要求したのです。聖書は、神に自分の欲求を押し付けることを「神を試みる」ことだと言っています。イスラエルの民は、そのわがままな欲望から、荒野で神を試み、その導きに従いませんでした。詩篇 106:14 に「彼らは荒野で激しい欲望にかられ、荒れ地で神を試みた。」とあるとおりです。

第三の分野は、「神への礼拝」です。モーセがシナイ山に登り、神の言葉を受け取っている間、人々は、こともあろうに、まことの神にかえて金の子牛を作り、それに犠牲をささげ、それを拝んだのです。まことの神を礼拝する民とされた人々が早くも偶像礼拝へと転落してしまったのです。礼拝は私たちの存在の軸とも言えるものです。軸が無いと形は崩れます。神への礼拝が崩れるとき、すべてが崩れます。聖書はこのとき、民は飲めや歌えの乱痴気騒ぎをしていた。(出エジプト 32:6) と言っています。私たちはある程度のことは本音と建て前を使い分けることが出来ますが礼拝とはワーシップつまり価値観を何に置いているか、一番頼りにしているものは何かということですから、何かにつけそれが滲み出てくるものです。イスラエルの民は、神への礼拝といういちばん大切なところで失敗してしまったのです。

3) イエスの誘惑にたいする勝利

イエスが受けた試みは、イスラエルが荒野で受けた試みと同じものでした。悪魔が「あなたが神の子なら、この石に、パンになるように命じなさい。」(ルカ 4:3) と言ったのは、イスラエルが荒野でパンのことで試されたことと呼応しています。人々は、人にいのちを与え、それを支えてくださるのが神であることを忘れ、神に信頼しませんでした。イエスは、『人はパンだけで生きるのではない』と書いてある。(ルカ 4:4) とお答えになって、人を生かしてくださる神に信頼しました。

つぎに、悪魔がイエスをエルサレムに連れて行き、宮の頂上に立たせ、「あなたが神の子なら、ここから下に身を投げなさい。」(ルカ 4:9) と言って誘惑したのは、イスラエルがたびたび神を試みたことと関連しています。人々は荒野で、自分たちの思いどおりに神の力を使おうとしました。しかし、イエスは『あなたの神である主を試みてはならない』と言われている。(ルカ 4:12) と答え、人目をひくためだけに神の力を利用することを拒否なされたのです。イエスは、このことによって、神のみこころと導きに従われました。

また、悪魔がこの世の栄華のすべてを見せ、「もしあなたが私の前にひれ伏すなら、すべてがあなたのものとなる。」(ルカ 4:7) と言って、イエスを誘惑したのは、神ならぬものを礼拝させようとする誘惑でした。礼拝とは何を拠り所にして生きるかということです。まことの神への礼拝から離れるなら、人は、この世の富や快樂、力や権威などを礼拝する者になっていくのです。イエスは、これにも、『あなたの神である主を礼拝しなさい。主にのみ仕えなさい』と書いてある。」と答えて、その誘惑を斥け、「神のしもべ」として生きられました。

「食べ物」「力や権威」「拠り所」といった3つの試み、あるいは誘惑が出ています。しかし考えてみると、これらの三つのことは、誘惑というよりは、むしろ、私たちが積極的に良いことだと思って求めていることではないでしょうか。私たちは、少なくとも食べることに困らない生活をしたいと望んでいます。また、私たちは、権力や権威というほどではないにしても、人から良く思われたいし、ある程度認められたいと思っています。出来たら誰かを助けたいとも思っています。そして、私たちは出来るだけ安全、安心なものを拠り所にして過していきたいと思っています。食べることに困らず、人から尊敬され、安心して暮らしていくということは、私たちが、むしろ、こちらから、そうしてもらいたいと思うようなことばかりです。

実は「試み」と「誘惑」は同じことばです。空腹で困っている人を見たら、パンがあげられたらと思います。けがや病気で苦しんでいる人がいたら危険から守ったり、癒してあげることが出来たらと思います。絶大な権威や力があれば助けてあげられるのにと 생각합니다。ここまでは善意です。そこに悪魔は軽い感じで「ちょっと私の言うとおりにしたら、私の前にひれ伏すだけでそれらは叶うよ」と夢を見させて誘惑してくるのです。そして全てと言って良いほど結果は悲惨なことになります。この世の栄華を見せてみなあなたのものになると言っても、それはウソで、この世界のすべては神様のものであり、悪魔のものではありません。しかしだからと言って悪魔のせいだけに出来ません。ヤコブの手紙 1:14 に「人が誘惑にあうのは、それぞれ自分の欲に引かれ、誘われるからです」とあります。私たちにも責任があります。

イエスは、これらの試みに勝利されました。多くの方は、「イエスは神の御子なのだから誘惑を斥け、試みに合格するのは当然だ」と言います。しかし、イエスは、神の子としての力によってではなく、人としてこれらの試みに打ち勝たれました。悪魔は、イエスに「もしあなたが神の子であるなら…」と言いましたが、イエスは、神の子としての力、超自然の力を使って、石をパンに変えたりはしませんでした。もちろんそれは可能なことですが。超自然の力を使ったのはむしろ悪魔のほうで、イエスを神殿の屋根の端に立たせたり、世界のすべてを見渡せる高いところに連れてゆくなど、普通ではできないことをしています。また、イエスはご自分の知恵、知識を使って議論し、誘惑を斥けたのでもありません。イスラエルの人なら、誰でも、こどもでも知っている、ごく基本的な聖書を引用し、それによって誘惑を退けているのです。聖書を詳しく調べ上げて、「そんなみことばがあったのか！」と驚くような聖句を見つけなければ誘惑を退けることが出来なかったのではありません。つまりイエスは、神を信じ、父なる神の言葉に信頼する、ひとりの信仰者として、誘惑に勝利されたということです。これは、わたしたちにとって大きな励ましです。主イエスは私たちのために勝利して下さったのです。

みことばによって生きるとは私たちは先ずみことばによって生きる方向性が示されて歩み出します。しかし私達は自分の弱さや罪深さのゆえに試練や誘惑に会い、時には危機的な状況を迎えます。その中で十字架で私たちの罪を贖ってくださる程まで愛してくださるイエス・キリストの恵みと御力を示されます。そして改めてみことばの確かさと力を再確認することなのです。つまりみことばによって生きるとはみことばを通して神のいのちに触れ続けるということです。